

昔むかし、あるところに、ひとりの狩人かりうどがいました。狩人は、毎日森へ狩りに出て、たくさんかのえものをしとめました。

ところがある日のこと、いつものように狩りに出て、夕方まで走りまわりましたが、えものはいっぱきもとれませんでした。狩人は、

（えものを見つけるまでは、家に帰らないぞ）と思って、そのばんは森の中でねました。

朝になって、海辺うみべまでやって来ると、すなはまに大きな魚がいつぴき、うちあげられてもがいていました。狩人は、魚を海の中に投げもどしてやりました。すると、魚が、

「お礼に、何をさしあげたらいいでしょう」といいました。狩人が、

「何もいらないよ」と答えると、魚は、

「では、わたしのうろこを一枚いちまいお取りなさい。助けが必要ひつようになったとき、そのうろこを燃もやせば、すぐにあなたのもとにかけつけますから」といいました。

狩人は、魚のからだからうろこを一枚取って、ポケットに入れました。

それからしばらく歩いていくと、野原に出ました。そこに、とてつもなく大きな木が一本はえていました。狩人はその木の下でひと休みしました。うとうとしてみると、何かの音で目がさめました。起きあがってあたりを見まわすと、大きなへびがいました。へびは、木の上のわしの巢すをねらって登っていくところでした。巢の中にはひな鳥たちがいるだけで、親のわしはいません。狩人はすぐさまてっぽうをかまえて、へびをうちころしました。そして、また横になってねむりました。

しばらくすると、親鳥たちが巢にもどってきました。そして木の下に狩人を見つけると、いつもひな鳥を取っていくのはこいつだなと思って、おそいかかろうとしました。そのとき、ひな鳥たちがさげびました。

「その人に手を出さないで。その人は、へびをやっつけてくれたんだよ」

それを聞くと、親鳥たちは羽を広げて、ねむっている狩人のためにかげを作ってやりました。

やがて、狩人が目をさますと、親鳥たちは、

「子どもたちを助けてくださったお礼に、何をさしあげたらいいでしょう」といいました。

狩人が、

「何もいらぬよ」と答えると、親鳥は、

「では、わたしのしつぽの羽を一枚お取りなさい。助けが必要になったとき、その羽を燃やせば、すぐにあなたのもとにかけつけますから」といいました。

狩人は、わしの羽を一枚取って、ポケットに入れました。それから、また狩りをして歩きました。その日もやつぱり、えものはいつぴきもとれませんでした。

つぎの日の夕方になって、ようやくきつねをいつぴき見つけました。狩人は、

「ほお、いいところにあらわれたぞ」といって、ねらいを定めました。するときつねが、

「どうぞ、わたしをうたないでください。かわりに、あなたのおのぞみの物をさしあげますから」といいました。狩人が、

「いったい、何をくれるんだい」ときくと、きつねはいいました。

「どうぞ、わたしのせなかの毛を一本取ってください。助けが必要になったとき、その毛を燃やせば、すぐにあなたのもとにかけつけますから」

狩人は、きつねのせなかから毛を一本ぬいてポケットに入れ、またどんどん歩いていきました。

やがて、ある国にやってきました。その国のおひめさまは、なんでも見えるまほうの鏡かがみを持っていました。おひめさまは、国じゅうに、こんなおふれを出していました。

「わたしの目の前からすがたを消して、三日たつてもわたしに見つけられない人とけっこんします。もし、かくれているのが見つかったら、その人は打ち首です」

これまでたくさんの若者わかものが挑戦ちようせんしましたが、みな失敗しっぱいしておひめさまに見つかり、打ち首にされました。おひめさまはその首で高い塔とうをたてさせました。

狩人はこれを聞くと、自分も挑戦してみることになりました。

狩人がお城しろに行くと、かくれるために三日間があたえられました。狩人は、始めの二日間は、お酒を飲んで歌ったりおどったりして楽しくすごしました。「三日たつたら、首を切られるんだぞ」と人にいわれても、狩人はただわらうばかりです。

三日目、狩人は、海辺へ出かけていって、あの魚のうろこを燃やしました。たちまち、大きな魚が泳いできて、

「なんのご用ですか」とききました。

「ぼくを、かくしてくれ。だれにも見つけられないところへ」

魚は、狩人を飲みこんでのどの中にかくすと、深い海のそこへもぐっていきました。

おひめさまは、まほうの鏡をのぞいて世界じゅうさがしましたが、狩人は見つかりません。

「これで終わりだわ。あの人とけっこんしなくては」

ひとりごとをいいながら、おひめさまは、もういちど鏡をのぞきこみました。すると、深い海のそこに大きな魚がいつぱきいて、その魚ののどから、青いぼうしのふさかざりがちらつとのぞいていました。

「見つけたわ。魚ののどの中にいるわ」と、おひめさまはさげびました。

狩人がもどってきて、

「どうです。わたしを見つけれましたか」ときくと、おひめさまは、

「あなたは、魚ののどの中にかくれていましたね」といいました。

「そのとおりです。しかたがありません。わたしの首を切ってください」

けれども、おひめさまは、

「あなたほど上手にかくれた人は今までいませんでした。だから命は取りません。どこへでも行ってしまいなさい」といいました。

しばらくすると、狩人は、

（もういちどおひめさまのところへ行つてためしてみよう。首がなくなつたつてかまいやしない）と考えました。そして、お城へ出かけていきました。

こんどは、狩人は、野原へ出て、わしの羽を燃やしました。たちまち、わしがとんできて、

「なんのご用ですか」とききました。

「ぼくを、かくしてくれ。だれにも見つけられないところへ」

わしは、狩人をせなかに乗せて空高くまいあがり、天のはてまでとんでいきました。

おひめさまは、まほうの鏡をのぞいて世界じゅうさがしましたが、狩人は見つかりません。

「こんどこそ終わりだわ。あの人とけっこんしなくては」

そういって、さいごにもういちど鏡をのぞきました。すると、天のはてをわしが一羽とんでいて、そのせなかで青いぼうしのふさかざりがひらひらしていました。

「見つけたわ」と、おひめさまはさげびました。

狩人がもどってきて、

「わたしを見つけれましたか」ときくと、おひめさまは、

「あなたは、わしのせなかに乗っていましたね」といいました。

「そのとおりです。さあ、わたしの首を切ってください」

けれども、おひめさまは、

「いいからお帰りなさい。こんども命を助けてあげましょう。でも、もう二度と来てはいけませんよ」といいました。

ところが、しばらくすると、狩人は、またお城に出かけて行って、

「もういちどやってみます。三度目も失敗したら、どうぞ心おきなくわたしの首を切ってください」といいました。

狩人は、こんどは森へ行って、きつねの毛を燃やしました。たちまち、きつねがあらわれて、

「なんのご用ですか」とききました。狩人は、きつねにいました。

「ここからお城の中まで、あなをほってくれないか。おひめさまが鏡を見るときすわる、いすの下までほってほしいんだ」

きつねはすぐにあなをほりはじめました。あなができると、狩人はもぐって行って、おひめさまのいすの下にかくれました。そして、おひめさまがしきりに鏡をのぞきこんでいるあいだ、いすの下から、針でおひめさまのおしりをちくちくさしました。

おひめさまは、世界じゅうさがしましたが、こんどはどうしても見つけれませんでした。狩人がもどってきて、

「どうですか。わたしを見つけられましたか」ときくと、おひめさまは、

「いいえ、見つけれなかったわ。いったいどこにかくれていたの」といいました。

「わたしは、あなたのいすの下にかくれていました。そして、あなたが鏡を見ているあいだ、針であなたをつつきました」

おひめさまはそれをきくと、

「ああ、なんだかちくちくしたのはそれだったの」とさげびました。

こうして、狩人はおひめさまとけっこんして王さまになり、ふたりはいつまでもしあわせにくらしました。